

初等教育コース、小学校サブコース、「卒業研究」
担当教員: 秋山正宏 (英語教育講座)

「卒業研究 (2022 年度後期)」: 授業評価に関わる受講生への聞き取りとその結果についての考察

「卒業研究」は、どのコース・専攻に所属する学生にとってもそうであるように、(最低)4年間の学習の集大成としての卒業論文の執筆を目標として履修する必修科目である。

授業評価報告書で「卒業研究」を取り上げることは、ある意味極めて異例な事態とも受け取れるかも知れない。しかし、「卒業研究」が担う上述のような意義や位置付けを考えると、「卒業研究」およびそれに関連して行われる各種演習に関する評価および考察を行うことには、無視すべからざる意義があるように思われる。今回は、今年度に卒業論文を提出し、「卒業研究」の単位を取得することが確定している 2 名の学生(共に小学校サブコース所属)を対象に行った聞き取り調査の結果について報告し、若干の考察を行う。

今年度の卒業論文指導に関する演習は、英語準備室・会議室で、前期は 2 週に 1 度(火曜日 14 時 30 分から 16 時 10 分前後まで)、後期は週に 1 度(やはり火曜日 14 時 30 分から 16 時 10 分前後まで)のペースで行った。研究テーマは、「いわゆる副詞用法の now の品詞特性」および「日英語の心理動詞における自他交替」であり、言語学/英語学/日本語学の分野の研究であった。演習の内容は、(a) 基本的文献についての講読形式の演習、(b) 当該の研究テーマについてのコーパスを用いたデータ蒐集およびインフォーマントの用いた内省調査についての指導、(c) (b)のデータ蒐集および内省調査の結果についての考察と議論、(d) 卒業論文の構成、議論の展開、論文で用いる表現に関する指導が、主たるところであった。当該学生 2 名(以下では、学生 A および学生 B)を対象として行った聞き取り調査も、上に述べた演習および論文指導の各側面に光を当てたものとなっている。以下は、個々の質問項目とそれについての学生 A, B の回答、およびそれについての担当者の若干の考察である。

1. 「小学校サブコース演習」および「卒業研究」では、当初は 2 週に一度、4 年の後学期開始以降は、ほぼ週に 1 度のペースでゼミ/面会が行われましたが、この点についてどのように考えますか。

- a. 回数が少なすぎる
- b. やや回数が足りない
- c. ちょうどよい
- d. やや回数が多い

e. 回数が多すぎる

この問では、学生 A, 学生 B とともに c(「ちょうどよい」)を選択した。従って、今年度の指導学生 2 名はゼミ/面会の頻度について大きな不満を感じてはいなかったようである。

しかし、詳しく尋ねてみると、1 名の学生より、文献講読を行う場合に限って言えば、序盤の「2 週に 1 度」のペースが好ましく、後半の「週に 1 度」のペースでは準備に向ける時間が足りない旨の回答を得た。この点から、ゼミで取り上げる文献を場当たりに決定するのでなく、なるべく 1 年間(「小学校サブコース演習」まで含めると 1 年半)を見通した上でより計画的な文献講読/文献演習を行う必要があると感じた。ただし、これは学生個人の研究テーマの決定時期にも左右される課題である。

また 1 名の学生より、ゼミ/面会に割く時間枠が短く感じるとの指摘もあった。基本的に通常の授業と同様に 90 分の枠を用いてゼミ/面会を行ったのであるが、90 分の枠の中で 2 名の学生に対応する場合もあり、考察にあてる時間が短すぎる場合もあったようである。(十分な大きさの)ホワイトボード、黒板等の授業ツールの必要性から、個人研究室ではなく、英語教育講座共用の会議室・演習室を用いたのであるが、他の授業との兼ね合いもあり、長時間の利用が難しいという事情があった。次年度以降は、教員研究室を使用する機会を増やすことも検討せねばならないだろう。

2. ゼミでは基本的な文献の講読、データ蒐集/事実調査に関する指導、データ蒐集/事実調査結果についての議論が行われましたが、これらの点についてお尋ねします。

2.1. ゼミでなされた文献講読についてどのように思いますか。

- a. 扱った文献および講読の時間が不十分である
- b. どちらとも言えない
- c. 扱った文献および講読の時間が十分である

この問では、学生 A が b(「どちらとも言えない」)を選択し、学生 B が c(「扱った文献およ

び講読の時間が十分である」を選択した。従って、今年度の指導学生 2 名は扱う文献(の量)および講読の時間について大きな不満を感じてはいなかったようである。ただし、文献講読を行う場合の、ゼミ/面会の頻度に改善の余地があることは既に上で述べた通りである。

2.2. ゼミでなされたデータ蒐集/事実調査に関する指導について、どのように思いますか。

- a. そうした指導が不十分であった
- b. どちらとも言えない
- c. そうした指導が十分であった

この問では、学生 A が c(「そうした指導が十分であった」)を選択し、学生 B が b(「どちらとも言えない」)を選択した。従って、今年度の指導学生 2 名は、データ蒐集/事実調査に関する指導について大きな不満を感じてはいなかったようである。

しかし、詳しく尋ねてみると、2 名の学生が共に、データ蒐集や事実調査の際に前提となる予備知識について、しばしば不足していると感じたという旨の回答をした。両名とも、「英語学概論」、「英語学 1」、「英語学 2」、「日英語比較論」といった、言語学/英語学/日本語学の分野で卒業論文を執筆する上で前提となる内容を扱う授業を(ほぼ全て)履修済みであったが、内容によっては基礎的な事柄でもやや発展的なものについては、これらの授業で扱っていないものもあり、必要に応じて卒論ゼミの中でより組織的、体系的な学びの機会を設ける必要があるようだ。

2.3. ゼミでなされたデータ蒐集/事実調査の結果についての議論に関し、どのように思いますか。

- a. そうした議論が不十分であった
- b. どちらとも言えない
- c. そうした議論が十分であった

この問では、学生 A、学生 B ともに c(「そうした議論が十分であった」)を選択した。従って、今年度の指導学生 2 名は、データ蒐集/事実調査についての議論について、好意的な評価をしたようである。蒐集した用例や事実調査の結果についての考察は、卒業論文において個々の学生が独自性のある論を展開していく上で最も重要なポイントであり、今後もこの点に関する努力を継続したいところである。

3. 卒業研究を卒業論文にまとめる作業についてお尋ねします。

3-1. 卒業論文を執筆する上での構想を練る段階、論文全体の構成を考えて行く際の指導教員の指導についてどのように感じましたか。

- a. 論文の構成についての指導が不十分であった
- b. どちらとも言えない
- c. 論文の構成についての指導が十分であった

この問では、学生 A、学生 B ともに c(「論文の構成についての指導が十分であった」)を選択した。従って、今年度の指導学生 2 名は、論文の構成についての指導について、好意的な評価をしたようである。

しかし、実際には、卒業論文の最終的な章立てを決定したのが、1 名の学生については 2022 年 12 月の冬休みに入る前であり(これは例年通りである)、もう 1 名については 2023 年 1 月に入ってからであった。特に後者は例年と比較して遅い展開であったと言わざるを得ない。当該学生はこの点に不満を感じてはいなかったようであるが(「不安」は感じていたと思うが)、指導教員の立場としては反省するべきところであろう。

3-2. 実際に論文として執筆した文章についての指導教員の指導(文章の校正、表現面での指導等)についてどのように感じましたか。

- a. 文章についての指導が不十分であった
- b. どちらとも言えない
- c. 文章についての指導が十分であった

この問では、学生 A、学生 B ともに c(「文章についての指導が十分であった」)を選択した。従って、今年度の指導学生 2 名は、文章に関する指導について、好意的な評価をしたようである。詳しく尋ねてみても、特により個別的問題を感じていないようであった。

最後になるが、2 名の学生ともに、1 章ごとに締切を設定してもらえると、計画的な執筆が可能になるのではないかとの意見を持っているようであった。この点についても、次年度以降の参考としたい。